

高校受験

毎年この時期の受験生を見ていると、心が熱くなってくる。ほとんどの生徒は受験は初めて経験なのに、逃げずに一生懸命立ち向っている。頭の下がる思いである。

私の受験は逃げまくりであった。精神的に自分を追い詰めたことはなかったし、勉強も得意教科に逃げ込み、苦手な教科は最低限必要な量しかなかった。それで乗り切ってしまった。当然その後は荒波にもまれるわけだが。そして、これまた当然大きな後悔も味わった。やはりやるべきときにやるべきことをしっかりとやらなさいといけないのだ。

さて、こちらから見て精神的に追い詰められて逃げ場がなくなり、勉強が上手く回らない生徒も出てくる。そのような生徒には様々な要因がある。学校生活、友人関係、家庭環境、はたまた塾での生活。今まである程度充実した(本人が自覚しているレベル)生活を送っていたところに、受験という目の前の大きな壁。登ろうにも頂上がどこ

なのか、皆目見当がつかない。以前から漠然とでもその壁を遠くから見ていた生徒は、全貌をある程度把握出来てい



るので乗り切れる可能性が高い。ところがその壁を遠くから見ることで、目前では

めて見上げた生徒にはどこまでも続く壁でしかない。頂上など見えないのである。こうなると本人には高校受験のゴールなど見えはしない。勉強など手に付かない、やってもあまり身に付かなくなる。そんな時、周囲の人々は結果が出ないことにじれったくなり、さらに言葉で追い込んでいく。生徒はもう八方塞がりである。あとはもうなんとかやれることだけやって、嵐が過ぎ去るのを待つのみである。もちろん生徒自身にも非はある。いずれ来る壁の準備を怠ったということ。しかし今となってはそんなことはどうでもいいのである。壁をどう乗り越えるかである。

私はそんな生徒にはとにかく励ます。そして時間の許す限り勉強に付き合おうようにしている。その壁はどのようなものなのかを話し、それを乗り越えるためには我慢が必要だとも話す。つければそう簡単に返せるものではない。大体それまでうまく勉強が回っていなかったのならそんな簡単に取り戻せるものではないのだ。取り戻すためには忍耐も必要だし、それを支える周囲の人々が厳しくも暖かく見守らなければ、生徒はただやり過ぎただけで乗り越えることはできないのである。



人生の中で高校受験はたいしたことではないのかも知れない。しかし、生徒にとって人生初の一大イベントであり、今後の人生に少なからず影響することは間違いない。だからこそ自分自身の後悔と生徒への共感を胸に、私は精一杯の応援をしたい。

あと一ヶ月余。一緒にがんばろう。(岡本)

直前の過ごし方

1月16日より千葉県私立高校の前期試験が始まりました。27日からは後期試験。そして2月の下旬には特色化の試験です。いよいよ、入試のシーズンの始まりです。

昔の自分自身のことをこの時期によく思い出します。テストの直前になると私はある傾向がありました。それは、それまである程度コンスタントに勉強していたにもかかわらず、直前になると勉強が手につかなくなるということ。これが頻繁にありました。当時はなぜそうなるのかよくわかりませんでした。だが、今はわかる気がします。

過去問をやっていて、難しく出て来ないと意気消沈して、どこかあきらめの気持ちが出てきたり…。直前になり心の奥底で、このままやっても伸びない、間に合わないのではないかと思ったり…。

こんな思いが勉強にブレーキをかけていたのです。

ところで、「直前はあせってやってもしょうがない。のんびりと過ごさなさい。」というアドバイスをする人もいます。確かにこの意見に理があります。直前に焦って空回りするのもよくありません。心に余裕を持つことは大切なことです。

しかし、心に余裕を持ちながらも、最後の最後まで最善を尽くすこと…。このことは受験に限らず様々な面で必要なことではない

でしょうか。しかも、何もやらないうちから余計にいろいろなることが不安になり考え込んでしまいがちです。今自分がやるべきことに集中することによって、逆に心は落ち着いていくものです。

私の経験上、直前にやり続けることによつて不思議なことが起こることがあります。

過去問で難しかった入試問題が、本番の入試では易しくなって解きやすくなるということもあります。また自分の得意分野が出題されたり、直前にやった問題が的中ということもあります。

そして何よりも、合格最低点に達していかなくても、最後の最後まであきらめずにやり続けていくと、点数に表れない目に見えない力が着実につき、入試当日にその蓄積した力が一気に爆発し最後の最後で自分の最高の力を発揮するという生徒を何人も見てきました。あきらめるな、頑張れ受験生!!!

(白石)



自転車

自転車は素晴らしい。自転車に乗ったとき、あの風を切る感覚。ほどよく体を動かしている快さ。少しだけの緊張感。そして流れていく風景。ケヨーD2で買った一万一千円の愛車だが、毎日毎日、自分をちよつと幸せにしてくれる。私にとって、なくてはならないものだ。発明した人に感謝。作った人に感謝。

さて、私が自転車に乗れるようになったのは中一の秋である。今自転車に乗っている人の中で最も遅いのではないか。(とすれば、遅さでは日本記録ということになるはずだ。)

中学生になっても乗れないことは、みんなには内緒にしていたが、当然心の中ではひげ目を感じてはいた。だから、乗れたときは、とにかく嬉しかった。初めて知った、風を切る感覚。今までの風景が違って見えたことを覚えてる。

繰り返すが、「乗れるようになったのは中一の秋」である。そして、これもまた、日本記録かもしれないが、自転車に初めて乗ったのも同じ日だった。理由は二つ。私の家が貧しくて、自転車がなかったことと、私自身が意地っ張りだったことだ。

今と違って、自転車は貴重品で、自分の自転車を持っていない子供は皆無であった。でも、ほとんどの家には一台はあって、それは当然大人が乗るための頑丈で重いやつ。今のママチャリを大きくして、さらにサドルの下から前輪を支える支柱にマウンテンバイクのように棒(トップチューブ



ユーブというらしい)がついているスタイル。子供達は、当然サドルには座れないので、三角乗り(親の世代にはわかる?)をして遊ぶしかなかった。そして、中学生になる時に、自分の自転車(スポーツタイプ)を買ってもらう。この時の自転車、中学生になったこととの証明であり、誇りである。そういう時代

であった。

我が家は、生活保護世帯だったので、買えるはずもなく、我慢するしかなかった。それでも、弟は、友人の家の自転車を気軽に借りて、三角乗りもしていたし、スポーツタイプの自転車にも乗せてもらっていた。ところが、私は、意地っ張りです。乗せてくれ」とか「借してくれ」が言えなかったで、従って、乗れる以前に、乗ることもしていなかった。「あの日」がなければ、ひよっとしたら、高校を卒業するまで乗ることはなかったかもしれない。

中一の秋。「あの日」がやってきた。私は野球部に所属していたが、たまたま、先輩の高校生が練習を見に来てくれた。野球そのものも、教えるのも上手い先輩で、私が敬愛している方だった。練習が終わった後、突然先輩がこう言った。

「小林。お前は歩きだよな。お前は友達のところ遊びに行くから、お前はおれの自転車に乗っていい。おれの家まで届けよ。」
私は困った。困ったが、先輩には服従である。意を決して答えた。

「乗れません。」
「ん?今なんつった?もう一度言ってみろ!」
「乗れません。」

「何い!許さん。おい、お前ら!小林を今日中に乗れるようにしてやれ!できなかつたらお前ら全員、ケツバット百発だぞ!」

野球部の一年生は、きつとみんなちびった。私もちびった。でも先輩には逆らえない。で、家までの珍道中が始まった。急な上り坂と下

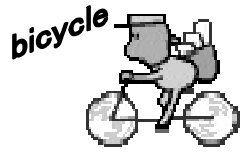
り坂を繰り返す道を、仲間達はみんな自分の自転車をひき、先輩の自転車にまたがる私を交代で支える。私が倒れると、起こして、また支えて...。ずいぶん長い時間がかかったようないきがするし、あつという間だったようにも思える。いつの間にか一人で乗れるようになっていた。

「やったぜ!」
「やった!」
湧き上がる歓声。私は嬉しかった。みんなが応援してくれたこと。乗れるようになったこと。実は、涙ぐんでいたのだが、夜も七時を過ぎていたので、きつとみんなにはばれていなかったはず。とにかく、私には一生忘れられない日となった。勿論、先輩には感謝である。牟礼先輩、ありがとう。

さて、その後、中学時代には、二度と自転車に乗ることはなかった。意地っ張りであることに加え、走ることに目覚めたせいで、とにかくよく走った。一日に、15〜20kmは走っていたと思う。自転車から、興味を失ったといってもいいだろう。そして、高校入学。

汽車通学(電車通学とはいわない)だったので、自転車は不要。文化祭か何かの時に、買い出しで友達の自転車に一回乗ったような気がする。で、終わり。

ところが、高三になって、自転車が急に大きな存在となった。母子家庭で、当然学費は出してもらえないという状況の中、大学への進学を志す私は、そのための手段を探し始めた。たどりついた結論は、新聞奨学生。寮に住み込んで新



聞配達をしながら、学校に通うという仕組み。これしかなかった。夢だけ大きくて、実行が伴わないタイプの私は、当然の如く浪人生に。これも、やっぱり新聞配達でいくしかない。

今と違って、当時は、自転車オンリー。大量の新聞を積んで乗れるだろうかという、一抹の不安を抱えつつも、上京した。配属先は日本経済新聞浅草専売所。入寮して驚いたのは、一度に積む新聞の量だった。五〇〇部ぐらゐを一回で自転車に積み込むのだ。ここまで積むのか。でも大丈夫だった。何とか積めて、乗りこなせて、二ヶ月後には、走りながら新聞をたたくので、走りながらポストに入れる技までこなせるようになって、一人前となった。ここには、とても書けないような刺激的で面白い出来事の多い生活だったが、それもこれも、自転車に乗れたお陰であった。あの日の牟礼先輩と仲間達に感謝感謝である。

(小林(健))

創学舎の本

-Sougakusya Books

愛の壁

お父さんお母さんあんなに愛する子供はいませんか

著者: 小林 憲石

二〇〇七年五月一日発行

(一五〇〇円税込)

新屋堂他全国書店にて好評
発売中!

▼卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
▼在籍していた教室までご連絡下さい。